opera
Osaka Prefecture University
Education and Research Archives
大阪府立大学 学術情報リポジトリ

Title	医学中央雑誌からみた看護情報学の動向とその捉え方
Author(s)	前川, 泰子; 坂本, 雅代; 野矢, 美佐子
Editor(s)	
Citation	大阪府立看護大学紀要. 2004, 10(1), p.65-73
Issue Date	2004-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10466/2824
Rights	

http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/

Bull. Osaka Pref. Coll. of Nurs. Vol. 10 No. 1
大阪府立看護大学紀要 10巻1号，2004

資　料

医学中央雑誌からみた看護情報学の動向とその捉え方

前川　泰子・坂本　雅代・野矢美佐子*

Trends of Nursing Informatics as reported in *Igaku-Chuo Zasshi produced by Japan Medical Abstract Society* ,and the Understanding

Yasuko MAEKAWA, Masayo SAKAMOTO, Misako NOYA*

Abstract The purpose of this study is to analyze transitions in the literature of Nursing Informatics in Japan, and to establish basic materials to elicit what Nursing Informatics should be.

We searched out 73 reports with the keyword "Nursing Informatics" in *Igaku-Chuo Zasshi produced by Japan Medical Abstract Society (Web version)* as of June, 2003. These reports have been classified into five categories and 21 subcategories. As for contents, the five categories have been 1) Practical use of nursing information, 2) Information education, 3) Construction of information systems, 4) Informational acquisition, and 5) Standardization of nursing information. Chronologically, these categories have been characterized in three periods. In the first period (1988～1994), reports were written about practical use of nursing information and information education, in the second period (1995～1999), about information systems, and in the third period (2000～2003), about informational acquisition and standardization of nursing information.

The development of Nursing Informatics must be systematized to select, correlate, and exploit nursing information, with full utilization of the capabilities of using computer science.

Key word: Nursing Informatics, Trends, *Igaku-Chuo Zasshi produced by Japan Medical Abstract Society*, Computer science

I. はじめに

今日の医療現場では，医療の充実や迅速な対応を目指してコンピュータが導入され，さまざまな情報システムの構築が進んでいる。その中にあって看護者は，患者へのよりよい看護の実践を目指して，看護情報の活用や共有化に向け，看護情報システムの充実に取り組むなど，医療の変化に対応する能力が求められている。

2003年にはコンピュータの普及に伴い，全ての高等学校で，〈情報〉という教科の設置が，設置者判断から義務に移行した[1, 2]。これまでの看護の高等教育機関における〈看護情報学〉の授業は，臨床で活用する必要性から，コンピュータの操作方法や統計処理，ソフトの使い方といったコンピュータリテラシーの要素が中心であった。しかし，この義務化によって今後大学以降の情報教育の内容が，初等中等教育のものと重複する可能性が危惧されている。

今後の看護情報学を考える上で，看護の持つ力を十分に発揮するためには，このような変化する時代や教育課程に対して，それに応じた体系化された看護情報教育の実施が課題と考えられる。しかし，これまでの看護情報学について

* 大阪府立看護大学医療技術短期大学部

体系化し論じ明らかにされているものは少ない[2-4]。

そこで，これまでの看護情報学が，どのような内容で論じられているのか，文献をもとにその内容を整理し，今後の看護情報学の発展に向けた基礎資料とすることを目的に，本研究に取り組んだので報告する。

II. 研究方法

研究対象は，医学中央雑誌 Web 版（2003 年 6 月）から，キーワード「看護情報学」で検索し，ヒットした文献73件である。総文献数が少ないことから，今回は文献の種類に関わらず，すべてを研究対象とした。

検索に医学中央雑誌を用いた理由は，国内で発行されている医学・歯学・薬学・看護学およびその関連領域から27万件以上の文献を網羅しているものであり，「看護情報学」の動向に焦点を当てるにあたり，看護領域でも広く活用されている資料と考えたからである。

なお，文献絞り込みにあたっては関連するキーワード「看護情報」での検索も検討した。しかし，医学中央雑誌において，「看護情報」は検索時の見出し語として未採択であるため，“看護情報”の文字列が含まれるすべての文献がヒットした。そこで，本研究の目的である，学問としての「看護情報学」に焦点を絞るため，「看護情報学」を候補語検索し，見出し語であることを確認して用いた。但し，医学中央雑誌において「看護情報学」のキーワードは 2000 年に採択されており，採択された時期が文献数の推移に及ぼす影響をみるため，見出し語として未採択である「看護情報」の文献数の年次推移と比較し，同じ推移を示すことを確認した。

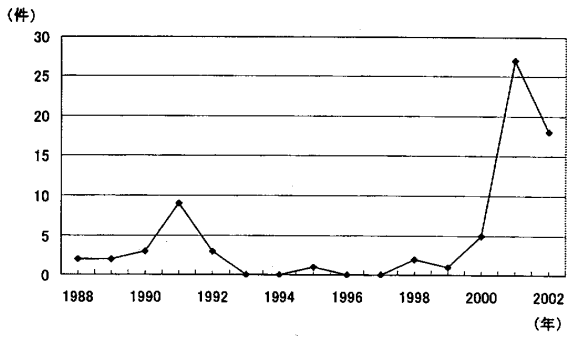

図 1　看護情報学に関する年次文献数

調査内容は，看護情報学の年次文献数，研究者（筆頭者）の所属別年次文献数，文献の種類別年次文献数，及び文献内容である。文献内容の分析にあたっては，文献を精読し，共通する内容をまとめカテゴリーを抽出し名称をつけた。なお内容分析の際には，研究者 3 名で合意が得られるまで検討し信頼性の確保に努めた。

III. 結果

1. 看護情報学の年次文献数

医学中央雑誌 Web 版は 1983 年からのデータが集約されていた。しかし，「看護情報学」で検索すると 1987 年以前の文献はヒットせず，1988 年から 2002 年の15年間に73件の文献がみられた。

文献数の年次推移は，図 1 に示すように，1999 年以前では，1991 年を除く 1988 年から 1999 年までは各々 0〜3 件，1991 年は 9 件であった。また 2000 年以降については，2000 年が 5 件，2001 年が27件，2002 年が18件であった。全体としての特徴をみると，73件のうち 2001 年以降の 2 年間に50件（68.5%）と集中していた。

2. 研究者（筆頭者）の所属別年次文献数

研究筆頭者の所属は，表 1 に示すように，大

表 1　研究者の所属別文献数

研究者の所属		合計	(%)
教育機関	大学	54	(74.0)
	大学図書館	2	(2.7)
	短大	2	(2.7)
	高校	1	(1.4)
	大学情報センター	1	(1.4)
	小計	60	(82.2)
教育機関以外	病院	11	(15.1)
	研究所	1	(1.4)
	企業	1	(1.4)
	小計	13	(17.8)
	計	73	(100.0)

学が54件（74.0%）と最も多く，次いで病院11件（15.1%），大学図書館2件（2.7%），短大2件（2.7%），高校1件（1.4%），大学情報センター1件（1.4%），研究所1件（1.4%），企業1件（1.4%）であった。中でも，大学，大学図書館，短大，高校，大学情報センター，研究所といった教育・研究機関に属する研究筆頭者の文献数は60件（82.2%）と8割以上を占めた。

研究者の所属を教育機関と教育機関以外（病院・企業・研究所）に分けて年次比較をすると，図2に示すように，1990年代は教育機関の報告のみであり，2000年になって初めて教育機関以外からの報告がみられるようになった。教育機関からの報告を年次別にみると，1990年代は合計19件（31.7%）であるが，2000年以降は2000年3件（5.0%），2001年18件（30.0%），2002年16件（26.7%）で合計37件（61.7%）と急増した。教育機関以外では2000年2件（15.4%），2001年9件（69.2%），2002年2件（15.4%）と2001年の報告数が多かった。

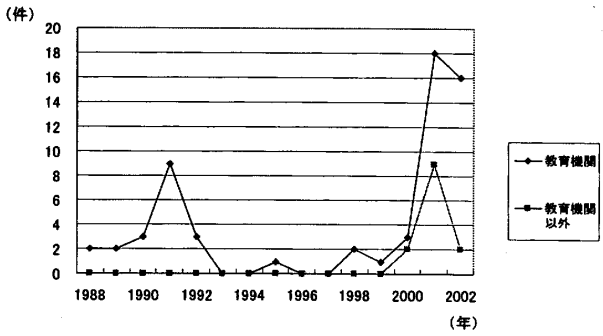

図2　研究者の所属別年次文献数

3. 文献の種類別年次文献数

文献の種類別による文献数は，表2に示すように，医学中央雑誌の分類をそのまま引用すると，原著25件（34.2%）が最も多く，次いで解説16件（21.9%），会議録15件（20.5%），解説/特集11件（15.1%），一般3件（4.1%），一般/特集2件（2.7%），総説1件（1.4%）の順であった。1999年以前においては，原著が18件で原著総数25件のうちの7割以上を占めるほか，会議録2件，解説/特集2件，総説1件であった。それに対して，2000年以降では原著7件，他の分類が43件となり，なかでも2001年に解説，解説/特集，会議録を合わせた合計件数が前年2000年の4件から23件と急増しているのが特徴的であった。

4. 文献内容

文献内容を精読し検討した結果，看護情報学がキーワードとなる73件の文献内容は，表3に示すように，5個のカテゴリーと21個のサブカテゴリーに分類することができた。以下にその内容について説明をする。

【看護情報の活用に関するもの】

看護研究のプロセスであるテーマの絞り方や文献検討，調査法，分析の仕方などの看護研究における情報のまとめ方に関するもの，看護実践で得た情報を看護過程や看護診断に活用するために情報を整理し解釈する考え方や，EBN（Evidence-based Nursing）の基盤とするための看護情報の捉え方に関するもの，また患者のプライバシーについて病院看護師を対象とした

表2　文献の種類別年次文献数

	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	合計	(%)
原著	2	2	2	9	3	-	-	-	-	-	-	-	-	2	5	25	(34.2)
解説	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	8	6	16	(21.9)
解説/特集	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	7	2	11	(15.0)
一般	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	3	(4.1)
一般/特集	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2	(2.7)
会議録	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	8	3	15	(20.5)
総説	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	(1.4)

表3　看護情報学の文献分析内容

文献の内容	発行年(件数)	サブカテゴリー	カテゴリー
看護研究における文献検索と検討および文献の信頼性	1991(2) 2001(1)	看護研究における情報のまとめ方	看護情報の活用に関するもの
統計処理の必要性とその実際	1991(2) 1992(2)		
アンケート調査の目的と方法	1992(1)		
看護研究論文の書き方	1991(1)		
病名の本質と扱い方	1991(1)		
研究テーマの絞り方と研究プロセスの概略	1991(2)		
看護過程、看護診断における情報の整理と解釈	1988(1) 2001(2) 2002(2)	看護情報の捉え方	
EBN(Evidence- based Nursing)の基盤となる知識や技術に関連する看護情報の捉え方と関連学問の紹介	1989(1) 2001(1)		
看護過程の各過程の内容	1988(1)		
患者のプライバシーに関する病院看護師の認識の実態調査	2002(1)	患者情報の捉え方	
高等学校の看護情報学のカリキュラムの作成とその教育内容	1990(2) 1991(1)	高等学校の看護情報学教育カリキュラム	情報教育に関するもの
大学生を対象にした大学入学以前の情報教育についての実態調査	2001(1)	大学以前の情報教育の実態	
看護学生を対象にした講義前後におけるPC(Personal Computer)に対する意識とPCを用いた情報活用能力の評価	2001(2) 2002(1)	看護学生の情報活用能力の評価	
短期大学生の情報活用能力とクリティカル・シンキングに対する志向性に関する調査	2002(1)		
環境教育用イントラネット構築に関する報告	1998(1)	大学における情報教育をとりまく環境	
大学におけるCAI(Computer-Assisted Instruction)教材の利用環境の実態や看護情報学の遠隔地講義による教育	2002(1) 2000(1)		
看護大学の臨床実習における守秘義務に関する指導内容の調査と結果報告	2002(1)	看護大学の臨床実習における守秘義務の教育	
日米の看護情報学についての教科書の比較	2001(1)	日本と欧米諸国の高等教育における看護情報学教育の比較	
日本の看護情報学の現状に関する実態調査をもとに欧米の教育内容との比較	2001(1)		
アメリカにおける看護情報学がどのように認知されたのかその歴史と今後の戦略	1999(1) 2000(1)		
欧米における看護情報学の状況紹介と日本における看護情報学の位置づけ	2000(1) 2001(1)		
「医療情報と教育の国際シンポジウム」看護情報学部門の抄録に基いた発表内容の分析	1990(1)		
看護の場と情報学の視点から見た看護情報学の役割	1989(1) 2001(2)	看護情報学への期待	
保健師を対象にした、講義前後におけるPC(Personal Computer)を用いた情報活用能力の評価	2001(1)	保健師の情報活用能力の評価	
医療情報システムにおける総合看護システムの開発と、その運用の成果や課題	2001(1)	医療情報システムの取り組み	情報システムの構築に関するもの
バーコード活用による看護業務の改善・充実に向けた取り組み	2002(1)		
リスクマネージメント支援システム	2001(1)		
電子カルテシステムの導入や看護情報の電子化に向けた開発と課題	2001(4)	電子化に向けた取り組み	
看護情報システムの紹介やその分類と看護計画システムの構築に取り組んだ概要	1995(1) 2001(2) 2002(1)	看護情報システムの取り組み	
欧米でのテレ・ナーシングに関する実態調査	2001(1)	外国における医療情報システム	
ヨーロッパの看護情報学の現状と流れ、インフラストラクチャーの考え方	1998(1)		
看護に関連した情報を入手するための準備や手順および探し方	2000(2) 2001(5) 2002(1)	情報の検索方法	情報入手に関するもの
メーリングリスト活用方法およびWebサイト紹介	2002(2)	情報源の紹介	
ファイルの保存・整理方法の紹介	2002(1)	情報整理の方法	
日常生活の意識に関するインターネットによる実態調査	2001(1)	インターネットの活用	
透析に関する医療情報のXML(Extensible Markup Language)言語による標準化の現状と今後の方向性	2002(1)	XML(Extensible Markup Language)言語による看護情報の標準化	看護情報の標準化に関するもの
電子化を前提とした看護用語の標準化の現状と課題	2002(1)	看護用語の標準化	
看護行為の名称の標準化とデータベース構築に向けた取り組み	2002(2)		

患者情報の捉え方に関するものなどが含まれる。サブカテゴリーは『看護研究における情報のまとめ方』『看護情報の捉え方』『患者情報の捉え方』の３つである。

【情報教育に関するもの】

高等学校における看護情報学のカリキュラムの作成とその教育内容について論じたもの，看護大学生が情報学を学ぶにあたって大学入学以前に受けていた情報教育内容についての調査報告，看護学生の情報教育の講義前後における情報活用能力の変化を評価したもの，大学における情報教育に関する教材・ネットワークを利用した教育環境の実態や遠隔授業の紹介，看護大学の臨床実習における守秘義務指導の実態を調査したもの，看護情報教育に関する諸外国の歴史や位置づけと日本の教育内容との比較分析，看護の場が求める看護情報教育の役割，保健師を対象にPC（Personal Computer）を用いた講義前後における情報活用能力の変化を評価したものなどが含まれる。サブカテゴリーは『高等学校の看護情報学教育カリキュラム』『大学以前の情報教育の実態』『看護学生の情報活用能力の評価』『大学における情報教育をとりまく環境』『看護大学の臨床実習における守秘義務の教育』『日本と欧米諸国の高等教育における看護情報学教育の比較』『看護情報学への期待』『保健師の情報活用能力の評価』の８つである。

【情報システムの構築に関するもの】

実際の病院における医療情報システムの中の看護情報システムの紹介とその主な取り組み，その運用と成果，看護計画システム構築の実際，リスクマネジメントを支援するシステム開発のために必要な医療情報システムと看護情報システムの連携，電子カルテシステムの導入に伴う看護情報システムの開発と課題，ヨーロッパの看護情報学にもとづくインフラストラクチャの考え方などが含まれる。サブカテゴリーは『医療情報システムの取り組み』『電子化に向けた取り組み』『看護情報システムの取り組み』『外国における医療情報システム』の４つである。

【情報入手に関するもの】

情報を入手するために，インターネットを利用する際の接続に必要なコンピュータのハード面，ソフト面の準備やその使用手順，医療・看護に関する文献の探し方から，情報源となるメーリングリストやサイトなどの紹介，また入手した情報を効率的に活用するためのコンピュータ上でのファイル保存や整理方法，研究のためにインターネットを利用したものなどが含まれる。サブカテゴリーは『情報の検索方法』『情報源の紹介』『情報整理の方法』『インターネッ

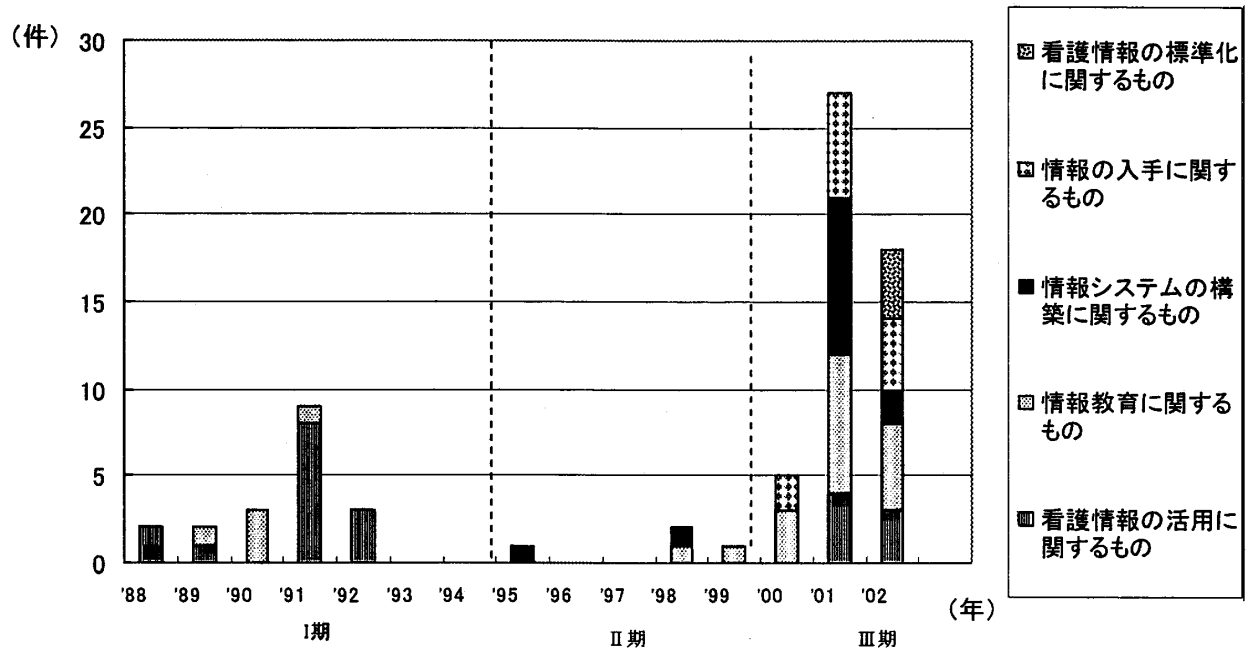

図３　カテゴリー別年次文献数

トの活用』の4つである。

【看護情報の標準化に関するもの】

医療情報や看護情報の一元化や共有化に向け，電子カルテなどの電子化を前提にした看護行為の名称・看護用語の標準化やデータベース構築への取り組み，また透析医療の現場を例にXML（Extensible Markup Language）言語を用いた施設間での看護情報の共有や看護の継続を実現する取り組みなどが含まれる。サブカテゴリーは『XML言語による看護情報の標準化』『看護用語の標準化』の2つである。

5．カテゴリー別年次文献数

文献内容を分析し，カテゴリー化したものを年次別にみると，図3に示すようになった。最初にみられたカテゴリーは【看護情報の活用に関するもの】で1988年に2件あり，その後，その中のサブカテゴリー『看護研究における情報のまとめ方』に関する文献がシリーズとして多く発表され，1991年から1992年に11件みられた。【情報教育に関するもの】は，1989年から1991年にかけて5件あり，その後断続的に発表され2001年に8件と最も多く見られた。また【情報システムの構築に関するもの】は，2000年は0件であったのに比べ，2001年には9件と急増し，【情報入手に関するもの】は，2000年は2件であったのに比べ2001年には6件と増えている。【看護情報の標準化に関するもの】においては，2002年に初めて4件論じられるようになった。全体として，2000年以前は，看護情報の活用や情報教育など，情報の普及を促すものが多く，2001年以降は，それらに加え，情報システムの構築や看護情報の標準化など実際の情報化に取り組んだ内容が増加している。

IV．考察

看護情報学に関する文献内容をもとに年次特徴でまとめてみると，1988年から1994年と，1995年から1999年，2000年以降の3期に区切ることができると考えた。そこで，1988年から1994年をI期，1995年から1999年をII期，2000年以降をIII期とし，その特徴をもとに考察する。

I期（1988年から1994年）の特徴は，【看護情報の活用に関するもの】14件と，【情報教育に関するもの】5件の内容がみられたことである。【看護情報の活用に関するもの】の中には，『看護研究における情報のまとめ方』に関する連載文献が11件含まれており，看護研究をまとめようとする看護学生，看護師を対象に書かれていた。これらの内容は，看護情報として必要なデータをどのように収集するのか，また得た情報をどのように整理，分析していくのか[5]など，看護実践および看護研究をする上で情報を活用できるように知識が提供されているものである。また，【情報教育に関するもの】の中に，『高等学校の看護情報教育カリキュラム』がみられる。1985年以降，コンピュータの技術革新でOS（Operating System）のユーザーインターフェース機能の向上と低価格の実現[6]により，コンピュータが一般社会に広く普及していった。このような社会の変化に対応するために，1989年文部省は，新高等学校学習指導要領[7]の中で，初等中等教育の段階から積極的に情報化に対応する教育に取り組む事を告示した。高等学校教育におけるその内容は，情報活用能力の育成を目的に，普通科では〈情報〉などの科目を設置者の判断で設けること，職業教育では，〈情報〉に関する科目を各教科にを取り入れることであり，看護においては〈看護情報処理〉が移行期間をとりながら設けられた。文部省の示した目標は，「社会における情報化の進展およびコンピュータの役割や仕組みとその利用方法について理解させ，コンピュータを活用する能力と態度を育てる」という，コンピュータとその利用に関する情報技術に重きをおいた内容であった。それに対し，森山ら[3, 8, 9]は，看護における情報処理を単に情報の操作技術教育に終らせるのではなく，情報の意味・意義を理解し，活用できる看護師を育てるために，看護情報教育を一貫した内容で教育できるよう，看護情報の理解から活用，看護情報システムの開発・管理まで段階的なカリキュラムを構成し，高等学校から大学院レベルまで，各教育機関に応じて内容を選択し教育する必要性を論じた。新学習

指導要領により，コンピュータ技術教育が義務教育から開始されることを鑑みれば，大学における看護情報教育で求められる内容は，看護過程を柱とした看護情報の収集・分析・判断・評価に応用できる知識と技術を習得した内容を深めることが必要だといえる。

II 期（1995 年から 1999 年）の特徴をみると，【情報教育に関するもの】の中で『大学における情報教育をとりまく環境』として看護教育用イントラネット構築の報告があった。また新たに【情報システムの構築に関するもの】がみられ，その中で『医療情報システムの取り組み』が紹介された。これは，前述したようなコンピュータの普及した社会背景のもと，病院施設では医療情報のシステム化が活発となり，検査・薬剤・レセプトなど職域単位に進み，ようやく『看護情報システム』の必要性が注目され始める時代となったと考えられる。看護管理支援や看護プロセス支援など，看護の情報をシステムとしてどのように開発していくか，その動きが出てきたといえる。

III 期（2000 年以降）の特徴をみると，新たに【情報入手に関するもの】と【看護情報の標準化に関するもの】が加わった。【情報入手に関するもの】では，全てにインターネットを利用した内容が含まれており，『情報の検索方法』に関する文献が，同カテゴリー12件中 8 件と多かった。その背景には，1993 年に米国において，初めてグラフィックスをサポートした WWW（World Wide Web）が発表され，インターネットによる世界規模の情報交換が容易となり，爆発的に普及したことがある[6]。わが国におけるインターネット普及率[10]は，1996 年頃から急速に上昇し，企業における普及率は 1996 年 50% であったのが，2000 年には，95.8% となっている。このようなコンピュータの急速な発展に伴い，溢れる情報の中から必要な情報を検索する方法，情報の概念，情報を扱うためのコンピュータの便利な使い方などを解説しているものが増えた。棟中[11]が「学生のリテラシー能力の向上がコンピュータに対し抵抗感をなくし，コンピュータ利用への意欲を高めることに繋がる」と述べたことからもわかるように，コンピュータによる効果的な情報活用のために，インターネットを利用した情報入手の方法などを解説したものが相対的に多くなっている。

それと同時に，【情報教育に関するもの】では『大学における情報教育をとりまく環境』『看護大学の臨床実習における守秘義務の教育』『日本と欧米諸国の高等教育における看護情報学教育の比較』が加わった。『大学における情報教育をとりまく環境』では，CAI（Computer-Assisted Instruction）教材の利用環境や遠隔地講義の実施報告などがある。これらはインターネットを用いた教材や教育内容の導入によるものであり，これまでの授業形態や内容が変化し始めたことがうかがえる。このような変化に対応するため，大学で教育を行う側は『大学以前の情報教育の実態』として，看護学生が大学入学以前にどの程度コンピュータリテラシーを備えているかを予め調査し，把握しておく必要を迫られたといえる。そしてこの時期に『看護大学の臨床実習における守秘義務の教育』の文献がみられたのは，インターネットや電子化された情報を誰もが簡単に手に入れられる状況で，情報漏洩に対する危惧が高まったためと考えられる。

また，『日本と欧米諸国の高等教育における看護情報学教育の比較』では，1999 年以前は 2 件であったのに対し，2000 年以降，5 件と増えている。その理由の一つは，欧米諸国の看護情報学の状況など，インターネットを通じて容易に世界の看護情報教育に関する動きが得られるようになったことであり，もう一つは，1999 年，新たに文部科学省から出された学習指導要領[1]による「2003 年度に全ての高等学校における〈情報〉という科目の開始」が目前となり[2]，改めて看護大学における看護情報学教育について，その内容の見直しを迫られたことが考られる。さらに海外では，1999 年11月，国際医療情報連合 International Medical Informatics Association（IMIA，1979 年米国で発足）が Health and Medical Informatics の教育についての勧告（2000 年に一部修正）を出し，推奨カリキュラムを発表したこと[2, 12]，また同年ヨーロッパでは，看護師の IT（Information Technology）能力向上のために国

際的に計画されたナイチンゲールプロジェクトが作成したオンラインテキスト項目が発表されたこと[2]などの影響が考えられる。前述の表2が示す文献の種類別年次文献数において2000年以降，解説，会議録の文献数が急増しているのは，こういった海外での国際的な看護情報の動きを特集したものや情報入手の方法などを解説したものが増えたためである。

そして，【看護情報の標準化に関するもの】の中では，『看護用語の標準化』が3件と増えた。看護情報の標準化は，情報共有の課題の一つである。米国においては，1970年代に看護診断や分類のため用語標準化の動きが始まり，国際看護婦協会（ICN：International Council of Nurse）[13]も看護の発展のためには世界各国で共通理解できる看護実践を表す用語が必要であることを指摘している。その中で，Norma Langは，「それに名前を付けることが出来なければ，それをコントロールすることも，それに対して財源を確保することも，それを研究することも，教えることも，政策化することも出来ない。」と述べている。すなわち，看護の要素を表現するための共通言語を持たない限り，対象の特性の違いなどを超えて，看護実践を比較できるような形で記述することは不可能であり，また，他職種からなるヘルスケアチームにおける看護職の独自性を明確に示すことが出来ず，専門職ナースと看護補助者の業務の違いを記述することも出来ないというのである。この言葉を象徴として，1989年看護実践国際分類事業で看護実践国際分類（ICNP：International Classification for Nursing Practiceアルファバージョン）[13]が発表され，1999年にはICNPベータバージョン[14]も発表された。

それを追って，わが国においても，2000年，2001年に厚生科学研究費補助金21世紀型医療推進研究事業として，「わが国における看護実践国際分類（ICNP）の妥当性と普及に関する研究[15]」が行われ，インターネットを利用して情報を公開し，その内容をフィードバックして収集している[16]。また，2001年，政府の「保健医療分野の情報化を推進する」という「e-Japan重点計画」[17]を受けて「医療情報の標準化委員会」が発足され，「看護用語・行為」の用語/コードの標準化もその対象となり，2003年度完成に向け現在活動している[15, 18]。インターネットの普及，情報の電子化への動きと共に，チーム医療や在宅医療における多職種との連携など患者を取り巻く環境の変化の中で，情報の共有に関する課題は重要であり，看護情報の標準化の実現は急務であると考える。

V. まとめ

わが国における看護情報学の始まりは，医療上で発生したデータを集め，断片的なデータを統合し知識と結びつけて総合判断し，看護実践および看護研究をする上で，どう有意義なものとして活用していくかにあったといえる。その後，コンピュータの技術革新などにより情報システムが構築され，看護情報の標準化と共有化へ考えは発展した。コンピュータ技術の進んだ米国では，Graves and Corcoran[19]は，看護情報学を「コンピュータサイエンスと情報科学，看護科学を組み合わせることによって看護についてのデータ，情報，知識の処理と管理を行い，臨床看護と看護ケアの提供を支援するものである」と定義している。そして，Hannah[19]は，ナースが果たすべき役割における情報活用の技術と考え方について，「患者を中心とした看護活動」，「病院情報システムの看護業務での活用」「看護計画作成支援のための人工知能や意思決定システム利用」などを述べている。これらの内容は，患者により良い看護を提供するために，その一手段としてのコンピュータをどのように活用するかであり，今回文献検討した内容において，日本での看護情報学の目指す方向と違わない。つまり看護情報学に求められる目的は，患者をとりまく看護活動においてコンピュータサイエンスの力と，その情報を意味づけ活用する看護者の力があわさり，患者へのよりよい看護の実現に向け看護学としていかに発展させていくのかに収束するのではないだろうか。そのためにも，基盤となる看護情報学の体系化が進むことが期待されているのである。

最後に，医療を取りまく環境の急速な変化に伴い，日本医療情報学会においては，2000年に初めて看護部会が設立され，看護情報が学問

として広く注目されるようになった。そしてそれと同時期に医学中央雑誌では「看護情報学」のキーワードが新たに設けられている。そういった中で調査した本研究結果には限界がある。しかし，まさに今，看護情報学がその確立に向け歩む中で，これまでの日本における看護情報学の文献を見直し，その特徴を明らかにしたことは，これからの看護情報学の動向を見据えていく上で意味があると考える。さらに今後の課題として，本研究で明らかになった，急速に開発・導入が進む看護情報システムに対して，看護情報学がその研究・開発・改良の基盤となるべく，その現状と動向を調査し検討を重ねていくことが必要であると考える。またもう一方で，諸外国の看護情報学の変遷と今後の動向にも目を向け，情報の共有化が叫ばれる中，国際社会の中での我が国における看護情報学のあり方についても考えていかねばならない。

文　献

1) 文部科学賞，高等学校学習指導要領，1999，入手先〈http://www..mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301d.htm〉，(参照 2003-10-10)
2) 山内一史，看護情報学で何を教えたらよいか？日本看護研究学会雑誌，24 (3), 151, 2001
3) 森山芙佐子，看護情報学のカリキュラム，看護教育，32 (6), 326-339, 1991
4) 栗原幸男，看護情報学教育をどのように位置づけるべきか？医療情報学20回連合大会論文集，996-997, 2000
5) 辻　和夫，ナースのための情報 ABC (5) 情報学ってなんだろう，看護学雑誌，52 (4), 398, 1988
6) 坂村　健，痛快！コンピュータ学，集英社インターナショナル，1999
7) 文部省，高等学校学習指導要領，1989，入手先〈http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/12/06/000606/000606w.htm#214〉，(参照 2003-10-10)
8) 森山芙佐子，看護情報学におけるカリキュラム，医療情報学10回連合大会論文集，271-274, 1990
9) 森山芙佐子，看護情報学におけるカリキュラムの作成，東京慈恵会医科大学雑誌，105 (6), 817, 1990
10) 総務省，我が国におけるインターネットの普及状況，2000，入手先〈http://www.soumu.go.jp/hakusyo/tsushin/h13/html/D1111000.htm〉，(参照 2003-10-10)
11) 柊中智恵子，看護学生の情報リテラシー能力育成のための一考察，熊本大学医療技術短期大学部紀要，11, 17-26, 2001
12) 栗原幸男，欧米における看護情報学教育の分析に基づく提言，医療情報学21回連合大会論文集　892-893, 2001
13) 国際看護協会（ICN）/（輪湖史子訳），看護実践国際分類（ICNP）/アルファーバージョン統合のためのフレームワーク，インターナショナル　ナーシングレビュー，臨時増刊号，日本看護協会出版社，1997
14) 国際看護協会（ICN）日本看護協会看護実践国際分類研究プロジェクト訳，ICNP ベータバージョン，インターナショナル　ナーシングレビュー，日本看護協会出版社，2002
15) 厚生労働省，厚生科学研究費補助金（21世紀型医療開拓推進研究事業）2001，入手先〈http://square.umin.ac.jp/ciglmhlw/pdf/s01.pdf〉，(参照 2003-10-10)
16) 宇都由美子，電子化を前提とした看護用語標準化の現状と課題，看護展望，27 (6), 35-39, 2002
17) 政府 IT 戦略本部，e-japan 重点計画，2001，入手先〈http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/dai3/jyuten/〉，(参照 2003-10-10)
18) 厚生労働省，保健医療分野の情報化にむけてのグランドデザイン，2001，入手先〈http://www.mhlw.go.jp/shingi/0112/s1226-1b.html#0〉，(参照 2003-10-10)
19) キャサリン・J・ハンナ他著（法橋尚宏監訳），看護情報学への招待，中山書店，2002